

エックハルトにおける intellectus adeptus

——エックハルトとトマス・アクィナスにおける「すべてのものを照らす光」——

高橋 淳 友

1 問題の提起

本論は、intellectus adeptus という特殊な知性の在り方をエックハルトが受容する際に、エックハルトに対しトマス・アクィナスが及ぼした影響について考察することを目的としている。アヴィケンナやその他のイスラムの思想家は、哲学者や預言者という特殊な人々に人間知性の完成された在り方を見出している。こうした知性の状態を、彼らは 'aql mustafād (「獲得された知性」) という用語¹⁾——そもそもは、アフロディシアスのアレクサンダーの *νοῦς ἐπίκτητος* に由来するものである²⁾——を用いて説明する場合がある。これは簡単に述べると、人間知性に対して働きかける分離した能動知性が、形相として人間知性に結びついた状態だとされる。

キリスト教思想家のなかにも、イスラム思想との出会いのなかで、上記のような意味で intellectus adeptus を取り入れた人々がいる。アルベルトゥス・マグヌスもまたそうした一人である。アルベルトゥスは『デ・アニマ』(Lib.3, Tract.3, Cap.11)において、「可能知性」が「光」を受け取るという形で「能動知性」との接触を日々重ねることにより、可能知性に対し、能動知性がさながら「質料の形相」のように固着してゆき、ペリパトス派の人々により intellectus adeptus et divinus³⁾と呼ばれる在り方になると述べている。これはまた、分離実体を観想するという働きやさらには預言をも可能にする⁴⁾とされる。

アラン・ド・リベラによれば、エックハルトは、アルベルトゥスから intellectus adeptus を受け継いでいるとされる。リベラは、『中世哲学史』において、シュトラスブルクのウルリッヒやエックハルト等のドイツ人ドミニコ会士たちが、アルベルトゥスの影響下で intellectus adeptus を受容したと指摘している⁵⁾。だがエックハルト

において、こうしたアルベルトゥスの影響を指摘する場合、問題となることがある。それは、エックハルトとトマスとの関係である。エックハルトは、イスラミ的な意味での *intellectus adeptus* に対し否定的見解を示すトマスに対しても、依拠するところ大であったからである。

イスラミ的な *intellectus adeptus* に対するトマスの批判の一環として、〈神的な在り方〉にまでいたる知性の〈漸次的昂進〉の問題を挙げることができる。先に挙げたアルベルトゥスは、*intellectus adeptus* を知性の在り方の漸次的昂進として捉え、預言も可能にする神的な在り方にまで至る連続性を想定している。それに対してトマスは、被造知性にとっては、質料的事物を認識しつつした、現世的知の完成ということ自体が不可能ではないかと考えており、また仮にそれをなし得たとしても、それから、質料的事物より上位の分離した能動知性との知的結合——アルベルトゥス流の〈神的在り方〉——に進み得ることはないとしている⁶⁾。

したがって、エックハルトがアルベルトゥスから上述の *intellectus adeptus* の概念を受け継ぐことができたとしても、それはそう単純な仕方で継承しているとは考えられない。エックハルトはトマスの見解に留意した上で、この概念を受け継いだはずである。実際、エックハルトのトマスに対する依拠は、恐らく終生変わるところがなかったと思われる。例えばそれは、エックハルトの晩年近くに開始された異端審問の際の弁明のなかで、トマスに精通していない者が自分を異端視していると非難している⁷⁾ことから推察される。これを見る限り、エックハルトはアルベルトゥスの「弟子」であると同時に、彼の意識としては、トマスの「弟子」でもあったといえよう。そして、このようなトマスに対する依拠は、*intellectus adeptus* を受容する際にも想定しうるのではないか。それは、特にキリストの知性認識に関するトマス説の受容という点に顕著に現れているのである。

先行研究の中には、エックハルトにおけるキリストの位置付けを、人間がそれへと向かう「範例」とした上で、エックハルトのキリスト論、受肉論を論じたものがある⁸⁾。本論では、これらの先行研究において取り上げられていない事柄として、特に、*intellectus adeptus* に関係づけて、いわば知性認識論の観点から「範例」としてのキリストを論じる。この「範例」としてのキリストの知性認識の在り方が、「神の言葉」と人間キリストの知性の関係についてのトマス説に基づいていることを示すことを通して、アルベルトゥスを介し *intellectus adeptus* 説を受容する際、エックハルトが

トマスに依拠していたことを明らかにする。

構成としては、まず、神とその被造物である我々との関係が、自然本性的なものから恩寵の充溢したものへと転換し、我々が神人キリストとの同形性に至る過程が、「熱の比喻」で示される intellectus adeptus として捉えられている様子を示す。その上で、エックハルトの考えているキリストの知性認識の在り方が、トマスのそれと近いものであり、その限りにおいて、エックハルトがトマスのキリスト論を取り入れつつ、intellectus adeptus の説を受容した可能性があることを示す。

2 獲得された知性

エックハルトは『離脱について』で、「離脱 (abegescheidenheit)」した在り方を次のように説明している。

「アヴィケンナという一人の師が次のように述べている。すなわち、精神が離脱した状態にあると、その精神の高貴さは極めて大なるもので、精神が見るものはすべて真なるものであり、その求められるところのものはすべて与えられ、その命じるところが何であれ人はその命令に対して柔順にならざるをえない、と。そして、あなたはこういったことを真実と知るべきである。つまり、自由な精神が正しい離脱の状態にあるなら、精神は神をその精神の存在へと強いるのである。そして彼が、形相のない状態とあらゆる偶有的なものがない状態にあることができるなら、彼は自らに神の特性を帯びるであろう。」⁹⁾

リベラは上記の『中世哲学史』で、エックハルトにおける intellectus adeptus について論じた際、この文を引用している¹⁰⁾。この引用について考える場合、まず問題になるのは、アヴィケンナが述べていたとされる、周囲を従わせる「離脱した精神」とは何であるかということである。コールハンマー版の注では、このアヴィケンナへの依拠に関し『靈魂論』の一節が挙げられている (*Liber Sextus Naturalibus Pars 4 c.4, Ed. Veneta 1508 f.20vb*)¹¹⁾。ここで述べられているのは、預言者の特性でもある、「物質に対する魂の作用力」についてである。つまり、魂が「高貴な類似の諸原理に (nobilis similis principiis)」一致することで、質料は魂に従属し、そして「高貴で最も強力な魂」は、固有の身体を越えて外界に働きかけることができるのだとされている。具体的には、病弱なものを健康にしたり、あまつさえ雨を降らせたりといったようにである¹²⁾。こうしたアヴィケンナの見解は、例えばトマスの『真理論』のある

異論でも言及されている¹³⁾。そこでは、アヴィケンナを典拠として、「外的質料がそれに服する程の魂の力」が預言には必要だとされているのである。

これらの点を考え合わせるなら、恐らくエックハルトが踏まえている〈アヴィケンナの「離脱した精神の力」〉もまた、預言者の力を意味していたものと考えられることができる。リベラも指摘するように、エックハルトは離脱した人間と預言者を同一視しているのである¹⁴⁾。だがこの後エックハルトはさらに、「私は生きているが生きてはいない。キリストが私の内で生きている」というパウロの言葉を引用し¹⁵⁾、「キリスト」すなわち〈神の言葉〉、〈神の子〉が我々の内で生きることと、アヴィケンナ的な「離脱した人間」(預言者)を重ね合わせている。

そもそも離脱とは、エックハルトが『離脱について』の冒頭で述べているように、彼が諸書を読み捜し求めてきた、「それによって人が特別にそしてもっともびたりと神に結びつき」、「恩寵により本性から神であるものになりうる最高最善の徳」¹⁶⁾であるとされる。そしてこの最高最善の徳は、「神の流入 (das götlich influz)」の受容を最大限可能なものとなさしめて、「キリストとの同形性 (einförmigkeit mit Kristô)」を通した「神との同形性 (einförmigkeit mit gote)」を可能にするほどのものなのである¹⁷⁾。先のアヴィケンナを踏まえた言及からはまた、離脱は、恩寵に基づく「神的な流入」によって、いわば intellectus adeptus として、ただの人間、つまり被造物としての自然本性的な在り方から、神人キリストとの「同形性」、さらには神との「同形性」に転じることを可能とするものであるといえる。

『ヨハネ福音書注解』においてもまた、intellectus adeptus という在り方は、「神の子」となること、つまり〈言葉の内在〉に関係づけて語られている。エックハルトは、『ヨハネ福音書』の、「彼は彼らに神の子となる能力を与えた」を、「そして言葉は肉となって我々の内に住んだ」を踏まえて解釈し、神が肉になり、「目に見えるようにそして感じられるように」我々の内に住むことで、次第に我々が「神に等しい形のものに形成される」のだとしている¹⁸⁾。それを踏まえて彼は、そのような、神の形に形作られていく過程から、「哲学者たち」が intellectus adeptus について下記のような捉え方をしたと述べるのである。

「ある哲学者たちはこう主張した。彼らが分離実体だといっていた能動知性は、その能動知性の光を介して、表象において我々に結びつけられ、その能動知性は、我々の表象能力を照らし、照らすことで浸透しているのである、と。これが繰り返

返されると、多くの知性認識により能動知性はついに我々に結合され、形相となり、そして我々はその実体に固有な働きをするようになる。例えば、それと同様に『分離した存在者』を認識するようになる。その哲学者たちによると、それは我々における〈intellectus adeptus〉である。さらにこうしたことを、我々は感覚的な仕方です『火』について見る。』¹⁹⁾

ここで注目すべき点は、「言葉」が内在し「神の子」となることが、intellectus adeptus として「火」の例に関係づけられていることである。同様な、「言葉」が内在し「神の子」となることと「火」の例の結びつきは、『ヨハネ福音書注解』の以下の文においても認められる。

「[ヨハネは] 次のように述べている。『彼の栄光を我々は見た』と。すなわち言葉が肉となり我々の内に住まうのを [[我々は見た]。『恩寵と真理に満ちて]。というのは、我々が『神の子ら』である場合、我々に神的存在 (esse divinum) が伝達されるからである。したがって、神から流出し発出する恩寵と真理の充溢が伝達されるのである。上で火の形相の例で示されたように。』²⁰⁾

こうした、火の「例」という「熱の比喩」が、まさに比喩として用いられることになる〈加熱〉の特徴は、『ヨハネ福音書注解』の記述によると、熱せられたもののが「火」と同様熱くなる点にあると言える。例えば、鉄が火によって連続的に熱せられ、火が鉄の形相と化したかのようになり、鉄が「火の業」を行うようになったり、燃えている炭が、「火の業」を、火の存在と形相において行うようになる²¹⁾、という具合にである。いわば、働きかけられるものが働きかけるものと一致して、働きかけられるだけの〈足場のなさ〉から脱却する在り方である²²⁾。したがって、火の例(熱の比喩)を用いて「神の子ら」となることが語られる場合、それはまさに、「神的存在」が「伝達」され〈神の言葉〉が内在することによって、神から「存在」を授与される²³⁾のみの〈足場のなさ〉——これが被造物としての自然本性的な在り方である——から脱却することを意味する。エックハルトの言葉を用いれば、上で示した熱の比喩のように、intellectus adeptus として、神からの恩寵に満ちた「神的な流入」を受け続けることによって——〈質料的事物をすべて知ること〉によってではなく——、神の働きの「相続人 (heres)」²⁴⁾となる訳である。

ここで強調したいのは、この「神の子ら」となるという在り方は、まさにキリストがそうであったような、〈神の言葉〉がペルソナとして「肉」になるという在り方が

想定されているということである。エックハルトは、「本性的に (naturaliter) 神の子」である「言葉」の受肉の第一の成果を、「私たちが養子縁組みによって (per adoptionem) 神の子らとなること」とした上で²⁵⁾、「私」も神の子であるよう、「私」においてペルソナ的に言葉が肉となったのでないなら、「人間のためにキリストにおいて『肉となった言葉』も「ささいなことだ」と述べるのである²⁶⁾。以上見てきたように、エックハルトは、キリスト以外の人間でも、神人キリストの在り方をとって、キリストと同様に神と一致することが可能であると考えている。つまりエックハルトは、トマスの用語を援用するならば²⁷⁾、〈verus homo ではあるが purus homo でしかない〉我々が、キリストと同じ、〈purus homo ではない verus homo〉に向上する可能性を措定しているのである。そうなることをエックハルトは、intellectus adeptus としての〈神の言葉〉の内在という形で捉えているのである。したがって、トマスとの関係性を念頭において、エックハルトにおける intellectus adeptus の受容を考慮する場合、必然的にトマスのキリストについての考察と、アルベルトゥスのそれを、「言葉の内在」という点から鑑みる必要が生じてくる。だがその前に、エックハルトがキリストの在り方をどのようなものとして考えていたかを見る必要がある。

3 エックハルトのキリスト論——離脱した人間としての

エックハルトは『離脱について』で、以下で見るように、キリストもまた離脱の状態にあったのだとしている。これはすなわち、エックハルトの説く離脱の在り方を参考にして、翻って神人キリストの在り方を論じることができることを意味している。では、エックハルトの言う「離脱」とは、具体的にはどのような在り方なのであろうか。先に離脱の在り方として、この我々において〈「キリスト」が生きること〉が挙げられていた。つまり、この〈現世に生きる人間〉としての側面を有しつつも、〈言葉の内在〉による不動の離脱——神が神であることも不動の離脱によるとされている²⁸⁾——により神と一体化することが意図されているのである。この内面における離脱には、外的な在り方は影響を与えないのである。こうした在り方をエックハルトは、感覚的な面である「外的な人間 (der ūzer mensche)」と、内面性である「内的な人間 (der inner mensche)」が、一人の人間に併存している²⁹⁾という形で説明している。そしてこうした在り方はまた、離脱した人間でもあるキリストにおいても認められる。エックハルトによると、「キリストと聖母がかつて外的なことに関し語ったことは何

であれ、彼らはそれを外的な人間という点で為しているのであって、内的な人間は不動の離脱の内にある]³⁰⁾とされる。

このような離脱した状態では、「人間」としての側面である「外的な人間」は、〈言葉の内在〉により神と一体となった自己の内面を、それ自体としては把握することはできない。というのも、エックハルトの言葉を借りるなら、離脱が極まると、「認識から認識なきもの」に、そして「光から闇」になる³¹⁾からである。キリストの場合もまた、彼が言ったり行ったりしたことは、「外的な人間」という、感覚的なものに基盤を有する人間の側面に帰されるのである。したがって、感覚的なものに端緒を有する「人間」キリストの知性もまた、内面の離脱を、そして自己における「言葉」を、それ自体として把握することはできないといってよい。それはとりもなおさず、そのような離脱によって結びついた神そのものが、被造物の力をはるかに越える、文字通り無限な存在だからである。

先にも述べたように、神が神であることも不動の離脱によるとされている。この、神の不動の離脱は、子が人として生まれ、そして受難した時も、「神が人にならなかったように」それらとは係りがなかったし³²⁾、さらには被造物の創造とも、それらが創造されなかったように係りがなかったとされる³³⁾ほどのものなのである。したがって、この被造世界内の存在としてある以上、〈人間〉キリストの〈被造物〉としての側面では、このような神の在り方——不動の離脱——を、そしてまた離脱によって神と一致した自己の内面を、それ自体として捉えることはできないのである。このような、〈被造物としての側面〉を有するが故に、〈人間〉キリストに対しても、神の完全な認識を認めないという〈キリストの知性理解〉こそ、以下において示す様にトマスと共通するものなのである。intellectus adeptus という概念で示される在り方、つまり離脱が、神人キリストの在り方を取ることであり、そのキリストの在り方が、アルベルトゥスよりもトマスと共通のものであるなら、エックハルトの intellectus adeptus 受容に、トマスの介在を見る必要が生じてくるはずである。だがそのためには、アルベルトゥスのキリスト論も比較検討してみる必要がある。ここで問題となるのが、キリストにおける被造物としての側面と〈言葉〉そのものとの関係である。

4 すべてのものを照らす光

アルベルトゥスは『命題集注解』第3巻 (d.14, a.1) で、「キリストの魂は神が知

るすべてを知るが、同じ仕方ですべてを知るのではない」と述べている。アルベルトゥスによると、神の無限さも、神にとっては把握しうる有限なものであるが、キリストの魂では、神の無限さを神のように把握することはできないのである。だが彼は先に引用したように、「キリストの魂は神が知るすべてを知る」と述べている。これは、キリストが把握できるのは「神によって知られた神ではないことどもすべて (omnia scita a Deo quae non sunt Deus)」であって、「神によって知られた神である当のこと (hoc scitum a Deo quod est Deus)」は把握できないという意味なのである。彼は次に (d.14, a.2), キリストの魂はすべてのものの認識を、ただ〈言葉〉において有しており、〈言葉〉は、他ならぬキリストに対してのみ「認識しうるすべてのものという点で」自己を開示するのだとしている。つまり「神によって知られた神ではないこと」に関してである。このような見解に対しては当然次のような問いを提出しうる。つまり「神の知ることをすべて知る」と述べつつ、その内実に、「神によって知られた神ではないことども」と、「神によって知られた神であること」を想定することは、神の知に、自己についての知と他者についての知という、〈部分〉を設けることになるのではないかという疑問である。

上記のアルベルトゥスの見解は、エックハルトからすると否定せざるをえないものと言えるであろう。それは一つには、エックハルトが『離脱について』で、離脱に伴う、「純粋性 (lûterkeit)」と「単一性 (einvalticheit)」と「不変性 (unwandelbærkeit)」、並びにこれらによる神と人との「同等性 (glicheit)」を主張しているという点からである³⁴⁾。また、『ヨハネ福音書注解』では、「言葉は神とともにあった。そして言葉は神であった」を典拠として、「至高のそして第一の神である知性にとっては」、スペキエスという観点から、「必然的に唯一の言葉があり、父と一つ」なのだとしている点からである³⁵⁾。エックハルトにとっては、「神の言葉」と神は一なのである。それ故、この「言葉」が内在する「離脱」を通して、キリストや「神の子ら」は、神との「同形性」、「同等性」にあるのである。こうしたエックハルトの見解とアルベルトゥスの先の見解は結びつかない。

では、トマスはアルベルトゥスのこうした見解をどう受け止めているのだろうか。トマスは、『真理論』において取り上げる³⁶⁾、「神を除いては、キリストの魂のみが神のなし得ることのすべてを知る」という見解に対して、被造物の有限性という点から否定的態度をとっている。ちなみにこの見解には、レオニナ版の注では、先のアルベ

ルトゥスの見解 (d.14. a.2) が含まれるものとされている。ではトマス自身が与する見解はというと、「キリストの魂は」、被造物としての側面からすると、「神がなしうるすべてのことを知ることは不可能」というものなのである³⁷⁾。

つまり、アルベルトゥスとトマスでは、有限な魂が無限なものを知るということの意味が違うのである。トマスによると、「神を本質によって見るものは、神の本質すべてを見る」のであるが、それは——アルベルトゥスと違って——、「神の本質は部分を持たない」ということを理由としている³⁸⁾。本質すべてを見ても、神を見るものが神の本質すべてを知り得ないのは、神の本質を知ることが、被造物の知性には荷が勝ち過ぎるからである。それに見合っているのは、神の知性なのである。では、トマスは、有限なキリストの魂に対しての、神そのものの関わり方を、知性認識論的にはどう理解しているのだろうか。

トマスは『神学大全』において、神の言葉は「この世に到来するすべての人間を照らす光」であるから、キリストには人間の精神は必要なかったとする見解に対し、キリストには人間の精神があったことを主張している³⁹⁾。トマスによると、「言葉」によって「照らされる」ことで、不要どころか、かえって人間知性は完成されるのである⁴⁰⁾。さらに、どの被造物よりも近くペルソナとして〈神の言葉〉に結びついているキリストの魂は、「それにおいて神を見る光の流入を (influentiam luminis in quo Deus videtur)」神の言葉そのものより受け取っているとされる⁴¹⁾。

こうしたトマスのキリスト論には、エックハルトのキリスト論、ひいては離脱との共通点がある。それはすなわち、神の言葉が受肉した存在でありながら人間の知性を有し、その被造物としての側面では、「照らすもの」である神を、それ自体としては知り得ないという点である。そして「言葉」によって照らされることで、人間知性が「完成される」という在り方は、エックハルトの「熱の比喩」で表される在り方とパラレルである。トマスにとってのキリストはいわば、「熱の比喩」で表される在り方に最初から立つ者なのである。エックハルトの intellectus adeptus の使用が、「言葉の内在」と、キリストとの同形性を通した神との一致を説明しようとするものならば、アルベルトゥス的なキリスト論よりも、トマスのキリスト論に近しいものがある以上、そしてエックハルトがトマスの「弟子」でもある以上、intellectus adeptus の受容において、アルベルトゥス—エックハルトの間に、トマスの介在を想定することは自然なことのように思われる。

ただし、こうしたトマスの介在を想定する場合当然問題が生じてくる。エックハルトは、「熱の比喻」等から明らかなように、預言者の在り方と神人キリストの在り方の間を埋めてしまう漸進性を認めている。だがトマスであれば、ペルソナとしての在り方に、キリスト以外の人間つまり〈purus homo〉が達し得るこのような漸進性は容認しないであろう。恩寵という超自然的なものによってさえも、キリストと同様に、人間が人性に加えて神性を獲得することはないのである。また一方、アルベルトゥスの *intellectus adeptus* に見られる漸進性も、キリストとの同形性までは射程に入っていないと思われる。アルベルトゥスは、「神の知ることのすべてを知る」といった、「受肉した言葉」キリストの特権的な位置は認めているのである。したがって、〈verus homo〉のうちでも、キリストを特権的な位置に置く点では、アルベルトゥスとトマスの間共通点を見出すことは可能である。だがエックハルトは、この二者と違って、キリスト的在り方まで射程に入れた漸進性を提唱しているのである。その点にエックハルトのキリスト論の特色があり、またそのラジカルさが表れているのである。

注

テキストとしては、アルベルトゥスの『命題集注解』第3巻 (*Commentarii in III sententiarum*) はボルニェ版を、『デ・アニマ』 (*De Anima*) はシュトロイックによる版を用いた。エックハルトの『ヨハネ福音書注解』 (*Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem*) と『離脱について』 (*Von abegescheidenheit*) は、コールハンマー版のラテン語著作第3巻 (*L.W.III*)、ドイツ語著作第5巻 (*D.W.V*) に収められているものを各々使用した。トマスの『真理論』 (*Quaestiones Disputatae De veritate*) と『神学大全』第3部 (*Tertia Pars Summae theologiae*) はレオニナ版を使用した。

- 1) 「獲得された知性」について言及しているものとしては例えば以下のものがある。
H.A. Davidson, *Alfarabi, Avicenna, and Averroes, on Intellect — Their Cosmologies, Theories of the Active Intellect, and Theories of Human Intellect*, New York, Oxford, 1992; 井筒俊彦『イスラーム思想史』文庫版, 中央公論社, 1991.
- 2) 井筒, 前掲書, p.232, Davidson, 前掲書, p.11参照.
- 3) Lib.3, Tract.3, Cap.11.
- 4) *Ibid.*
- 5) 阿部一智, 永野潤, 永野拓也訳, 新評論, 1999, p.493.
- 6) S.T. I, q.88, a.1.
- 7) G.Théry, “Édition critique des pièces relatives au procès d’Eckhart contenues

dans le manuscrit 33 b de la bibliothèque de Soest” *Archives d’histoire doctrinale et littéraire du moyen âge* (1926) pp.129-268 ; p.206.

- 8) 例えば上田閑照「マイスター・エックハルトの Inkarnatio 論——神秘主義的思弁の一例として」『中世思想研究』VIII, 1966, pp.46-65, R. Schneider, “The Functional Christology of Meister Eckhart”, *Recherches de théologie ancienne et médiévale* 35, 1968, pp.291-322, 田島照久『マイスター・エックハルト研究——思惟のトリアーデ構造 esse・creatio・generatio 論』創文社, 1996, 第4章2.
- 9) *D.W.V*, S.410-11.
- 10) リベラ, 前掲書, pp.496-97.
- 11) *D.W.V*, S.445.
- 12) ガザリーも「預言者」のこうした能力に触れている(『哲学者の意図——イスラーム哲学の基礎概念』黒田壽郎訳, 岩波書店, 1985, pp.329-33).
- 13) q.12, a.3, ob.9.
- 14) リベラ, 前掲書, pp.496-97.
- 15) *D.W.V*, S.411.
- 16) *Ibid.*, S.400-01.
- 17) *Ibid.*, S.430.
- 18) *L.W. III*, S.127-28.
- 19) *Ibid.*, S.128.
- 20) *Ibid.*, S.129-30.
- 21) *Ibid.*, S.128-29.
- 22) *Ibid.*, S.59-60.
- 23) エックハルトによると, 被造物の「存在」は「真の光」である神からの「光の流入」として与えられる(例えば, *L.W. III*, S.74-82 参照).
- 24) “heres”としての“filius”については, 例えば, *L.W. III*, S.61 参照.
- 25) *L.W. III*, S.101.
- 26) *Ibid.*, S.101-02.
- 27) <verus homo>, <purus homo> については, 例えば, *S.T. III*, q.1, a.2, *S.T. III*, q.2, a.5, ad 1, 参照.
- 28) *D.W.V*, S.412.
- 29) *Ibid.*, S.419.
- 30) *Ibid.*, S.422.
- 31) *Ibid.*, S.428.
- 32) *Ibid.*, S.414.
- 33) *Ibid.*, S.413-14.
- 34) *Ibid.*, S.412-13.

- 35) *L. W.* III, S.162.
- 36) q.20, a.5.
- 37) *Ibid.*
- 38) *Ibid.*
- 39) *S. T.* III, q.5, a.4, ob.2.
- 40) *Ibid.* ad 2.
- 41) *S. T.* III, q.10, a.4.